

2014年度 日本サウンドスケープ協会秋季研究発表会のご案内

研究発表会実行委員会

日 時：2014年12月6日

場 所：金沢工業大学イノベーションホール（扇が丘キャンパス 12号館 4階）

内 容：研究発表会（6日）、エクスカージョン「寺町界限と辻家庭園の散策」（7日 10:00-12:00）

参加方法：12月1日（月）までに以下の項目をメールでお知らせください。

氏名：

連絡先：

交流会 {出席・欠席} 懇親会 {出席・欠席} エクスカージョン {出席・欠席}

交通案内：金沢駅東口（8番乗り場）発 金沢工業大学行き

路線 33（寺地経由）

路線 35（久安大橋経由）

路線 32（円光寺経由。「円光寺」止まり、「錦丘高校前」止まりもありますのでご注意ください）



こちらもご参照ください→ http://www.kanazawa-it.ac.jp/about_kit/ogigaoka.html

交歓会・懇親会：発表終了後、交流会を行います。また、懇親会（予算は5,000円程度）も予定しています。ぜひご参加下さい。

連絡先：日本サウンドスケープ協会 研究発表会実行委員会

メール：office@soundscape-j.org

主催：日本サウンドスケープ協会

研究発表会プログラム

- 13:00 受付開始
- 13:30 オープニング・トーク 実行委員長 土田義郎
セッション1 司会 塩川博義
- 13:40 東京国立博物館の「音風景」(2) —— 明治時代の奏楽を聴く
松本玲子 (青山学院大学)
- 14:10 『音のレッドデータブック』制作現場からの報告
——武蔵大学メディア社会学科ゼミの取り組み——
兼古勝史 (武蔵大学社会学部メディア社会学科非常勤講師)
増田一真 (武蔵大学社会学部メディア社会学科2年)
杉山一生 (武蔵大学社会学部メディア社会学科2年)
- 14:40 静寂を聴く
佐故圭子
- 15:10 コーヒーブレイク (ミニ交流会)
セッション2 司会 兼古勝史
- 15:30 インドネシア・バリ島のガムランの変遷
——教育機関に関係のあるガムラン・ゴング・クビヤールの音高——
塩川博義 (日本大学生産工学部)
梅田英春 (静岡文化芸術大学人文社会学部)
皆川厚一 (神田外語大学外国語学部)
- 16:00 音からはじまる街づくり
——大分市での取り組みについて——
船場ひさお (フェリス女学院大学)
河原一彦 (九州大学大学院芸術工学研究院)
八坂千景 (NPO denk-pause)
- 16:30 クロージング・トーク (交流会・懇親会の案内) 実行委員 森原崇
(会場撤収・移動)
- 17:00 交流会 会費無料
(21号館2階「イルソーレ」にて) 参加者自己紹介+ひとこと
- 19:30 夜のまち巡り (ひがし茶屋街, 主計町界隈を散歩)
- 20:35 懇親会 (味楽ゆめり) 会費別

要旨集

東京国立博物館の「音風景」(2) —— 明治時代の奏楽を聴く

松本玲子 (青山学院大学大学院総合文化政策学研究科博士課程)

筆者は「博物館の音風景」の構成要素とその内容を、「展示室内の音」から「館内の音」「館周辺の音」と広がってゆき、さらに「館周辺地域の音」から「社会・歴史・時代の音」へ繋がっていくものとして捉えている。こうした考え方から、日本初の総合博物館である東京国立博物館の明治時代の音風景について調査した結果、人々の活気にあふれた展示室内の音や、西洋近代化と日本の伝統が反映された音などによって構成される当時の博物館の音風景の内容を把握することができた。ミュージアム・コンサートの専門家としての筆者にとっては特に、明治時代の博物館ですでに奏楽があったという事例の発見は興味深いものであった。そこで本発表では、明治時代の東京国立博物館の音風景の構成要素のなかでも「奏楽」を取り上げ、その内容を「式典のための奏楽」と「催事としての奏楽」に分けて考察する。

前者には、「軍楽隊による洋楽」と「伶人による雅楽」が、館周辺から館周辺地域である上野公園内にわたりリレー演奏をおこなった「開館式」、ならびに皇后行啓を象徴する「信号音」としての奏楽と共に、二十五年紀祝典では新作の祝典唱歌が歌われた「赤十字総会」奏楽があった。また後者は、邦楽演奏や舞楽に伴う奏楽で、同館が上野公園に移転し新たに開館する以前の「山下門内博物館時代」からの音風景を受け継ぐものであったが、これらの音風景からはいずれも、当時の社会・文化状況を聴き取ることができるのと同時に、その内容は、筆者がめざす「ミュージアムジーク」の位置づけを検討するためにも有効なものであることを確認することができた。

『音のレッドデータブック』制作現場からの報告

武蔵大学メディア社会学科ゼミの取り組み

兼古勝史 (武蔵大学社会学部メディア社会学科非常勤講師)

増田一真 (武蔵大学社会学部メディア社会学科2年)

杉山一生 (武蔵大学社会学部メディア社会学科2年)

武蔵大学社会学部メディア社会学科兼古ゼミでは、今年度、『音のレッドデータブック』の制作に取り組んでいる。

「レッドデータブック」とは、もともと絶滅のおそれのある野生生物について記したデータブックのことで、国際自然保護連合 (ICUN) が中心となって1966年に作成されたものに始まり、日本では、1989年に日本自然保護協会 (NACS-J)、世界自然保護基金ジャパン (WWF-Japan) から発行された、『我が国における保護上重要な植物種の現状(レッドデータブック植物種版)』、1991年に環境庁 (当時) が作成した『日本の絶滅のおそれのある野生生物—脊椎動物編』『同一無脊椎動物編』、およびその後の改訂版などが知られている。

その後この『レッドデータブック』は、例えば『地名レッドデータブック』(1994)、『民俗芸能レッドデータブック』(1997)、あるいは都道府県などの地域ごとに作成された野生生物のレッドデータブックなどのように、失われてしまった (失われつつある) 環境や文化等を表現する方法として用いられて様々な形のもので生まれている。

音に関しては、国会図書館の「歴史的音源」アーカイブ、あるいは環境庁 (当時) の「残したい日本の音風景100選」事業や各地域の音名所等のプロジェクト、「平野の音博物館」など、希少な音や地域限定の音、失われつ

つある音の風景などを保存し記録するいくつかのプロジェクトが行われているが、「レッドデータブック」という形でのアーカイブ化はまだ行われていない。

今回、私たちの制作する『音のレッドデータブック』は、時代や環境、暮らしや産業の移り変わりの中で、あるいは消え、あるいは変容してきた音について、調査し、記録することを目的としたデータベースで、作成にあたっては、「自然環境」「公共空間・産業」「家庭・生活」「メディア」の4つの観点から音を調査し、「絶滅音」「絶滅危惧音」「希少音」「地域限定音」の4つのフェーズに整理することとした。

発表では、現在私たちが作成中の『音のレッドデータブック』の進捗状況と課題を報告し、皆さまからのご意見ご助言をいただければと思っています。

静寂を聴く

佐故圭子

サウンドスケープという概念にとって、静寂とは何かをつかむことは非常に重要だ。

シェーファーも、サウンドスケープデザイナーに求められることは「沈黙がわれわれの生活の中で積極的な状態として回復された後に初めて実現される。心の内なる雑音をしずめること——これがわれわれの最初の仕事だ。そうすれば、他のすべては時のたつうちに自然にすすんでいくことだろう」と、「世界の調律」に記している。

静寂とはただ音が無いということではない。静寂は耳できくだけでなく、手で感じ、つかみ、見ることができるものである。それは日本という風土に培われた日本人の身体、感性、暮らしを、ひとすじの見えない糸のように貫いている。

本発表では、野口整体を中心とした私の体験・体感から、静寂を聴くことについて述べる。それは古くからの知恵、禅や覚者たちによって示されてきたことと一致する。静寂とは本来の自己である。私たちは静寂だ。静寂の中ですべては「整う」。それは言ってみればあたりまえで、世界はもともとそのようになっている。頭で「ああかな、こうかな」と考える内容は、頭の中にあるだけで実際には「無い」。「無い」ものにとらわれて事実や行動、創造の次元を見失って怖れたり悲しんだり立ち止まったりしているのが現代と言えよう。そのために人の心もけがれ、身体健康も侵され、自然の生態系も壊れてしまっている。

この静寂においては第一に、風邪や病気も敵ではなく、身体と心を整えてくれる。そして第二に、無心天心の生き方が、日本の身体性のもとでの音と暮らしを生み出してきた。それは「ふるまい」に表れる。掃除などで場を整えることは、整わない「違和感」への感受性を高め、調整を促し、美しい暮らしを形づくってきた。第三に「静寂の次元」では私たちはひとりひとりがバラバラの存在ではなく、すべてのいのちがつながっている。この認識こそが、行き詰まりの世界を甦らせ、21世紀を平和の世紀として築く道を開く。

インドネシア・バリ島のガムランの変遷

教育機関に関係のあるガムラン・ゴング・クビヤールの音高

塩川博義（日本大学生産工学部）

梅田英春（静岡文化芸術大学人文社会学部）

皆川厚一（神田外語大学外国語学部）

インドネシアのバリ島は、神々と芸能の島として知られている。バリ島の人々にとって、ガムラン音楽は生活の一部であり、日常の音風景には欠かせないものである。ゆえに、その音響的構造や変遷を知ることは、バリ島

の人々の音に対する好みやその変化を知ることでもある。本研究は、19世紀から21世紀までにおけるインドネシア・バリ島のガムランの変遷について、それら楽器の音響解析とバリにおけるガムラン演奏者あるいは所有者、楽器製作者および調律師へのインタビューを通して明らかにすることを最終目的としている。著者らは、いままでバリ島でいちばん一般的に用いられている編成ガムラン・ゴング・クビヤールを中心に50セット近くガムランを測定し音響解析を行ってきた。これらによれば、大体、ガムランのうなり周波数は5から10Hzの間で調律されていることがわかってきた。また、ガムラン・ゴング・クビヤールの音高や音程は、場所や時代によって異なることがわかってきた。本報では、6セットのガムラン・ゴング・クビヤールの鍵盤楽器における基本周波数の音高を分析し、比較検討している。6セット中3セットは1960年代にブラタ氏によって製作されたもので、そのうち2セットは20世紀後半においてバリ島で製作された多くのガムラン・ゴング・クビヤールに影響を与えた教育機関SMKIおよびASTIが所有しているものである。また、他の2セットは20世紀初頭に製作されたものであり、そのうち1セットはブラタ氏の父親であるレゴツ氏が調律を行なったものである。もう1セットはASTIを卒業したスダルナ氏によって1999年に製作されたものである。これらを分析した結果、6セットの音名1における音高は、いずれもC#あるいはDであることが明らかにされた。

音からはじまる街づくり 大分市での取組みについて

船場ひさお (フェリス女学院大学)

河原一彦 (九州大学大学院芸術工学研究院)

八坂千景 (NPO denk-pause)

ホルトホール大分が産学官連携事業として2013年度から3か年で推進する位置づけにある本プロジェクトについて、その概要とこれまでの取組みを紹介する。

大分市中心市街地は、市の複合文化施設ホルトホール大分が2013年7月に開館し、2015年春には大分県立美術館、JR大分駅ビルがオープン予定で、駅前広場の改修や道路整備も加わり、大きな変化を遂げようとしている。中でも、市美術館から県立美術館を結ぶ地区には、ホルトホール大分、県立総合文化センターがあり、ここを「大分県芸術文化ゾーン」と定め、「芸術での街づくり」を推進している。

街が変化する中、「音風景」に関してはこれまで一切手が付けられてこなかった。音はいつでもどこでも、目をつぶっていても聞こえてくるものであるだけに、街の雰囲気や左右する。このため、市中心市街地の「音風景」の現状を市民や子供たちと共に把握することから始め、芸術での街づくりを推進する大分にふさわしい「音風景」を見つけ出す。

2013年度は「音からはじまる街づくり」と題し、これまで「音風景」になじみのない市民を対象にシンポジウムを開催した。この際に初めて大分市を訪れた共同研究者や参加者から、大分市中心市街地を歩いているとさりげなく聞こえてくる音の中に、大分ならではの特色と魅力を持つ音が数多く存在することが指摘された。

2014年度は「街の音の風景をさがそう」と題し、子どもから大人までを対象に音さがしのワークショップを開催した。参加者からは多くのさりげない大分らしい音が挙げられた他、街の音への新たな視点に目覚めた参加者もあり、今後のプロジェクトの運営にも好影響を与えてくれるものと思われる。